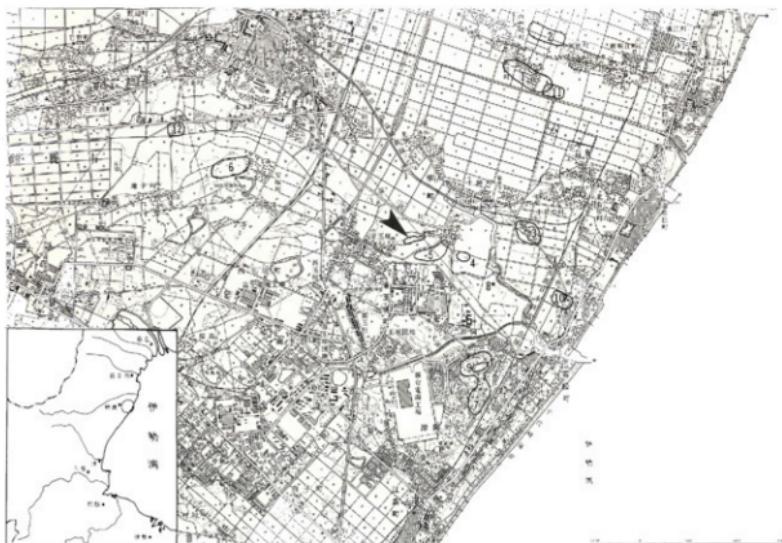


昭和53年度県営圃場整備地域  
埋蔵文化財調査報告 2

## 鈴鹿市東玉垣町 深田遺跡



深田遺跡位置図（国土地理院 1:25000 神戸・南五味塚）

1979・3

三重県教育委員会

## I 前 言

三重県教育委員会文化課においては、この数年来、年度当初において、県庁内の各事業実施部課に対し、事業計画を照会し、その事業実施計画地内の埋蔵文化財の保護につとめてきた。

県農林水産部耕地第二課に対しても昭和53年4月7日に照会し、その回答を5月9日に得た。その中で、県営圃場整備事業計画の鈴鹿市安塚地区計画地内には以前から弥生土器片等の散布がみられる深田遺跡の所在が知られていた。そのため圃場整備の工事計画と遺跡の範囲を確認するため、第1回の現地立合を7月12日に行なった。

当地域における圃場整備事業地内の埋蔵文化財の調査は、当遺跡より東方約500mの位置にある双ツ塚遺跡が昭和53年3月より発掘調査され、古墳時代初頭を中心とした大集落址が、膨大な量の古式土師器と共に確認されており、当遺跡においても現水田下に遺構・遺物が埋没されていることが充分予想された。

そこで、県農林水産部耕地第二課、四日市耕地事務所、県教育委員会文化課で遺跡のとりあつかいについて協議した結果、排水路部分を中心に試掘調査を行なうことになった。

11月15日に排水路部分及び周辺の試掘調査を行なった結果、弥生土器片、円筒埴輪片の出土と共に、掘立柱建物址の一部と思われる柱穴群及び大溝等の遺構を確認した。

そこで、再度協議の結果、工事計画上やむなく削平される部分について本調査を行なうことにして



深田遺跡航空写真（矢印左上 A区、右下 B区 東上空より）

なった。

本調査は三重県教育委員会が主体となり、昭和53年11月28日から同年12月26日にわたって行なった。尚、削平される部分が2箇所にわたった為、遺跡の西隅部にあたる東玉垣墓地西側をA区(約1,000m<sup>2</sup>)、北東隅部にあたる鉄塔周辺をB区(約400m<sup>2</sup>)と地区設定し、A区より調査を開始した。

尚、調査を進めるに際し、四日市耕地事務所、地元土地改良区ならびに工事の施行者株式会社新美組の各位の協力を得た。特に四日市耕地事務所には、航空写真や現況図面の提供等、種々にわたってご配慮を頂いた。又、発掘作業には地元東玉垣、中島地区の方々のご協力を頂いた。記して謝意としたい。

## II 位置・地形

鈴鹿山脈のいくつもの山なみにその源を発する鈴鹿川は、関町、亀山市の中央を横断し、鈴鹿市の北部を流れ伊勢湾に流入する。その中・下流域において肥沃で広大な沖積平野を形成する。

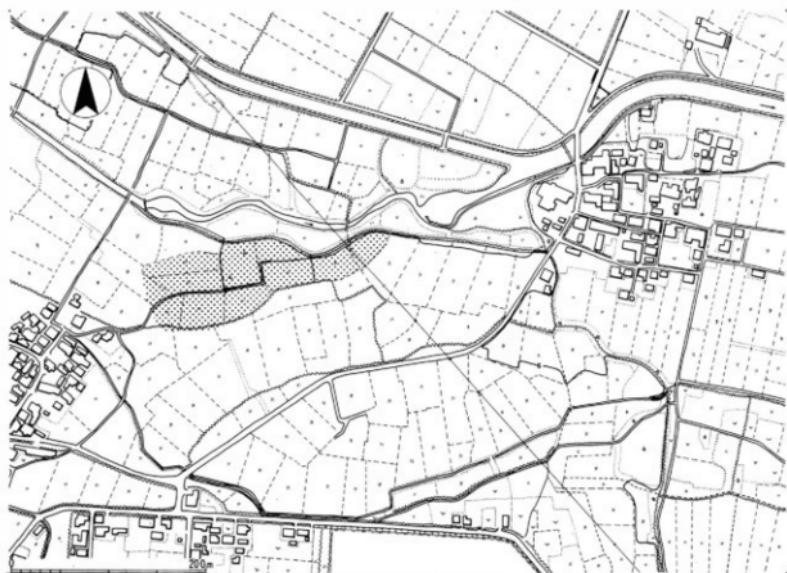
深田遺跡は鈴鹿川右岸、鈴鹿市の市街地より南東約2.5kmにあり、東玉垣町の集落と中島の集落のはば中間に所在する。又、遺跡の北を金沢川が伊勢湾へ南東流する。標高は6m前後で、両集落と同じ微高地上に立地している。現況はA区が水田、B区が畑地である。行政的には鈴鹿市東



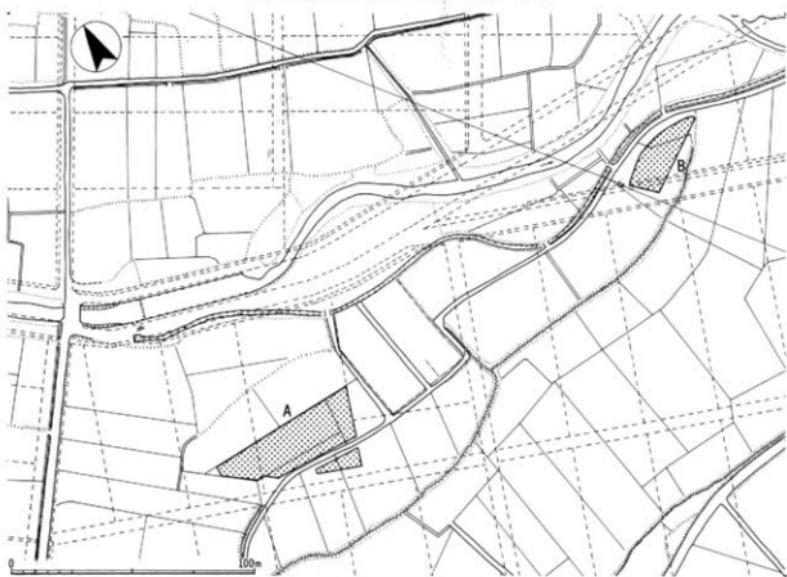
A区近景（西より）



B区近景（西より）



遺跡地形図（網目）(1:5000)  
 (鈴鹿都市計画平面図 59・66 1:2500 1971)



発掘区平面図 (1:2000)  
 (県営園場整備事業安塚地区玉垣第1工区現況計画平面図 1:1000)

玉垣町字北浦（A区）、深田（B区）に属する。

深田遺跡の周辺には濃密な遺跡分布が知られている。以下時代順に遺跡を概観してみる。

先土器時代、縄文時代の遺跡は鈴鹿川中流域や下流域の丘陵地や台地上に立地しており、この周囲の沖積地では知られていない。

弥生時代になると稲作の開始によりその生産基盤を河川の沖積地に求めるようになる。当遺跡より北東約2kmには上箕田遺跡（1）が所在する。上箕田遺跡は昭和36年と同45年の2度にわたって発掘調査が行なわれ、前期から後期にいたる各時期の土器が大量に出土した。また銅鐸型土製品の出土地としても知られている。他にも上箕田北遺跡（2）、土師南方遺跡（3）、双ツ塚遺跡（4）が所在する。

古墳時代では、双ツ塚西方遺跡（5）、安塚遺跡（6）が知られている。発掘調査によって竪穴住居址を検出している遺跡としては、稻生町・伊奈富遺跡、徳田町・畠遺跡等が知られている。古墳も少なくない。鈴鹿川流域の初現的な前方後円墳は国府町を中心にみられるがこの地域にはない。当遺跡より南東約1.5kmの岸岡山には全長50m前後の前方後円墳3基を含む岸岡山古墳群（7）が所在する。又、塚越1号墳（8）も南東約1kmに所在する。

奈良時代になると諸国に律令政治の拠点として国府をおくようになるが、伊勢国府が鈴鹿川中流域右岸の国府町に推定地として所在する。又、国分寺、国分尼寺の建立も始まり、鈴鹿川下流域左岸の国分町に所在する。

中世の城館址もいくつか知られている。岸岡城址（9）、南若松城址（10）、上箕田城址（11）、澤城址（12）等が点在する。

### III 遺構

#### （1） A 区

遺跡の西部にあたるA区約1,000m<sup>2</sup>から検出された遺構は、弥生時代中期の土塙1基、古墳時代の溝址3条、土塙1基、奈良時代の掘立柱建物址1棟、時期不明の溝址1条、その他多数の柱穴群である。

これらの遺構は調査区各所で検出されているが、中央部から南部にかけて密であり、調査区の南部を通る排水溝試掘に際し多くの遺構を検出していることもあわせて、遺構は南部の調査区外に続くものと思われる。又、地山面は調査区北部に向って徐々に傾斜する。

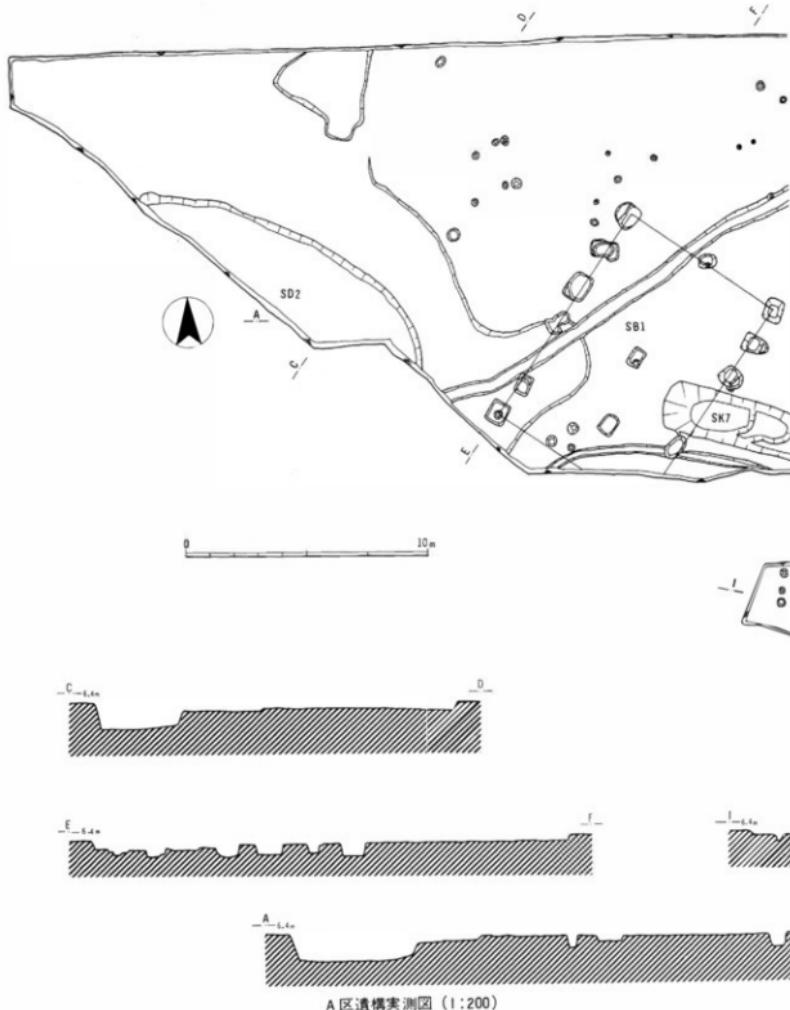
層序は、第1層に濁灰色の水田耕作土が約20cmあり、第2層に暗茶褐色粘質の遺物包含層が続き、第3層が黄褐色砂質の地山となるのがA区の基本的な層序である。しかしながら調査区の北東部は第2層の遺物包含層が非常に薄く、又、全く含まない箇所もあった。遺構は第3層の地山面まで掘り下げることによって検出できた。又、SD2やSK7では第3層に黒褐色粘質の遺物包含層が続き、特にSD2では第4層として遺物を含まない青灰色シルト層が続いた。

#### 1. 弥生時代中期の遺構

S K 6 調査区北部で検出された土塙である。古墳時代の溝址S D 3によって切断されているため全体の形狀は不明である。最大幅1.8m、深さ20cm。遺物は甕形土器が口縁部から胴部にかけて1点出土した。

## 2. 古墳時代の遺構

S D 2 調査区西部で検出した溝址である。幅4m、深さ1.3m。非常に大きく深い溝址である。排水溝試掘の際、2箇所で同様の溝址を検出しており、円形にめぐる溝址と思われる。遺物は円



筒埴輪片が主であるが、弥生土器片、須恵器片、山茶織片が少量含まれる。

S D 3 調査区中央を南西から北東に横断する溝址である。北東隅で S D 4 と重複する。幅50cm～70cm、深さ25cm。傾斜地へ続く北東隅では幅90cmを計る。遺物の量は非常に少ない。

S D 4 調査区東部を南東から北へ横断する溝址である。北部で S D 3 と重複し、傾斜地へ続く。幅70cm、深さ30cm～40cm。遺物は多く、S字状口縁をもつ夔形土器、ひさご形土器、高杯形土器等が出土した。これらは特に東部分に集中した。



S K 7 調査区中央西寄りで検出された大きな土塙である。幅7.5m×2.5m、深さ20cm～60cm。東から西にかけて深くなる。遺物は円筒埴輪片が多量に出土した。その量はA区の出土遺物の約半分を占める。

### 3. 奈良時代の遺構

S B I 調査区中央西寄りで検出された掘立柱建物址である。桁行6間、梁行2間。10m×7m。棟方向はN 35°Eである。柱穴の掘り方は一辺80cm前後と大きく、方形である。深さ40cm～50cm。柱痕跡は掘り下げる段階で検出できないものがほとんどであった。柱通りも悪く、溝址や土塙との重複で柱穴を検出できなかった箇所もある。

### 4. 時期不明の遺構

S D 5 調査区中央を東部に横断する溝址である。幅30cm、深さ15cm。遺物は全く出土しなかった。



S B I (北東より)



S D 4 (北西より)



A区全景（西より）

## (2) B 区

遺跡の北東隅部分にあたるB区約400m<sup>2</sup>から検出された遺構は、弥生時代後期後半の竪穴住居址5棟、時期不明の柵列状遺構1である。又、多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物址の様に整然と配列される柱穴はない。

遺構は調査区各所から検出されており、周囲の土器散布状況から南部や西部の調査区外へも続くものと思われる。

層序はA区と同様に第1層として濁灰色砂質の畑耕作が約10cmあり、第2層に暗茶褐色粘質の遺物包含層が約10cm続く。第3層は赤褐色砂質の地山となる。A区と比較して浅い面で遺構が検出できた。

### 1. 弥生時代後期後半の遺構

S B 1 調査区東端で検出した竪穴住居址である。一辺が6m。全体の形状は不明である。周溝は幅16cm、深さ8cm。主柱穴、貯蔵穴、炉址は不明。遺物は壺形土器、甕形土器、高杯形土器などである。

S B 2 S B 1 の西隣りで検出した竪穴住居址である。規模は4.5m×4.7mの方形。幅20cm、深さ13cmの周溝が巡る。床面は住居外より5cmほど低く掘りこまれている。主柱穴は不明。床面中央で炉址に推定される焼土が検出され、その焼土を中心に甕形土器、高杯形土器が出土した。

S B 3 調査区西寄りで検出した竪穴住居址である。規模は5.5m×5.4mで方形。幅20cm、深



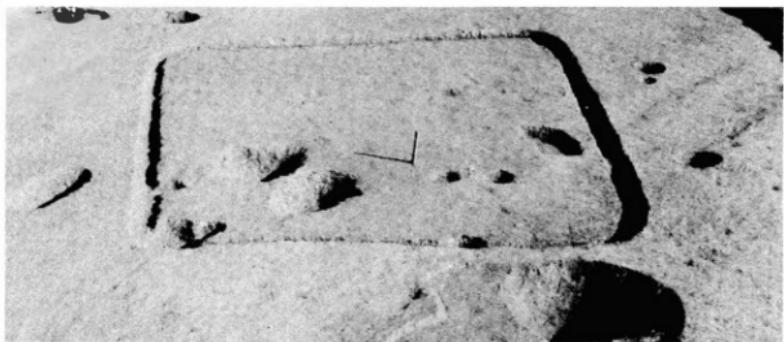
さ15cmの周溝が巡る。床面は住居外から10cmほど掘りこまれ、他の竪穴住居址に比べると残りが良い方である。主柱穴も1箇所欠けるが検出できた。直径40cm~50cm、深さ15cmの柱穴である。焼土を西辺にもつ。遺物は少量であった。

**S B 4** S B 3と重複して検出した竪穴住居址である。切りあい関係からS B 3より古いものである。西辺のみの検出であるが、床面は住居外より15cmほど掘りこまれている。1辺7.5m。周溝は不明。

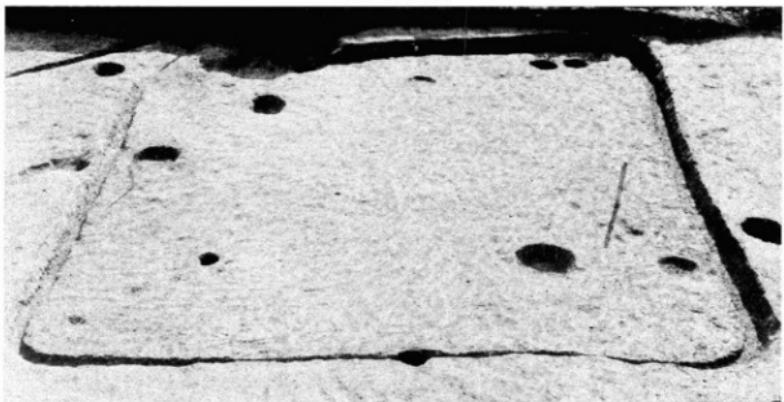
**S B 5** S B 3、S B 4の東隣りで検出した竪穴住居址である。床面が削平されており、周溝のみの検出である。幅16cm、深さ8cm。1辺4.5m。

## 2. 時期不明の遺構

**S A 6** 調査区中央で検出された棚列状遺構である。南北軸に直交して地山面を12cmほど掘りこんで壁をつくる。その壁に沿って径30cm、深さ30cm~35cmの柱穴を1列に配している。柱穴は1.2m等間である。



SB2 (西から)



SB3 (北から)



B区全景 (西から)



S A 6 (北西より)

## IV 遺 物

### (1) A 区

出土した遺物は、弥生時代中期後葉から室町時代に至る各時代の土器を主として、石製品、土製品などがある。完形に近い形で出土したものもいくつかあるが、そのほとんどは破片である。弥生土器は特に遺存状態が悪く、器表が剥離してその調整方法が不明なものが多い。

これらの遺物は調査区各所から出土しているが、円筒埴輪片、形象埴輪片は全て遺構から出土しており、古式土師器もそのほとんどが遺構からの出土である。

#### 1. 弥生時代中期後葉の土器

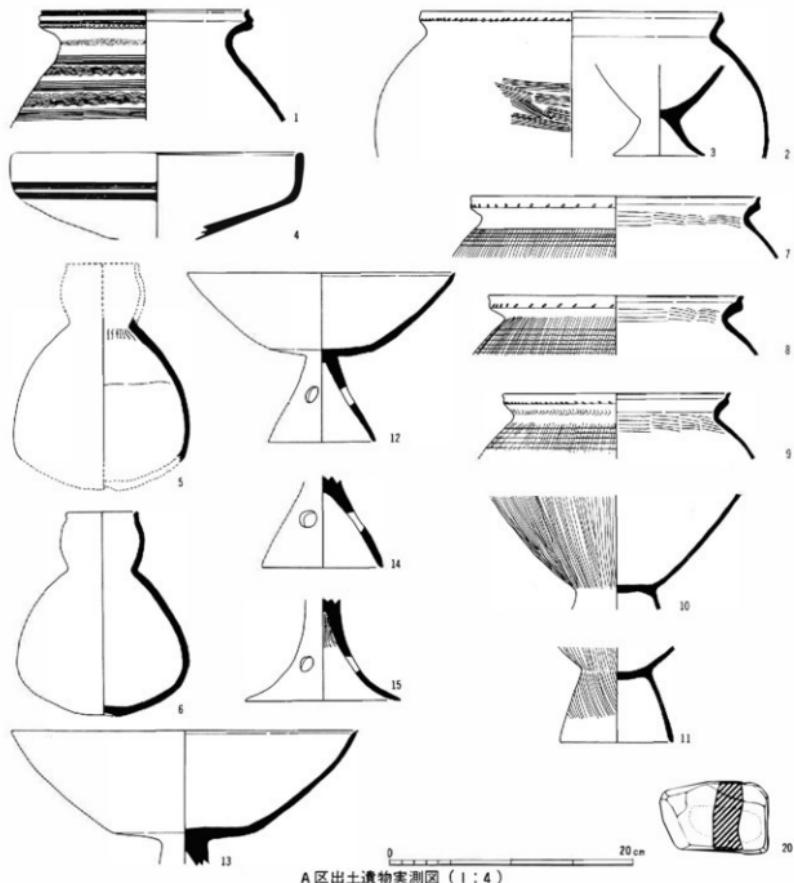
壺形土器（1～3） 1は、受口状の口縁部をもつ土器である。口径17cm。口縁部には2条の凹線文が巡り、頸部に櫛状工具の刺突文が施される。胴部の施文には櫛状工具による横線文と波状文が並用されている。淡黄色を呈する。SK 6から出土したものである。2は、口径24.8cm、胴部径32.4cmの大形品である。頸部から短かく外反し、たちあがりぎみに端部がつまみだされる口縁部をもつ。口縁部外面稜線上に刺突文が巡る。胴部に横方向の細かい刷毛目が残る。口縁部は明茶色、胴部は内面、外表ともに黒色を呈する。3は底部である。台部は短く、大きく開く。茶褐色を呈する。2、3はSD 4出土である。

高杯形土器（4） 口縁部径24cm。杯底部から徐々に開き口縁部で内側へ折られる。口縁部外面に2条の凹線文が施される。口縁部は平坦になる。赤褐色を呈するが一部で黒色となる。

#### 2. 古墳時代の遺物

壺形土器（5～6） いずれも小形品で、ひさご形土器と呼ばれるものがある。5は口縁部と底部を欠くが、6はほぼ完形で出土した。6は口径5.8cm、胴部16.5cm。底部がくぼむ。共に胴下部に最大径をもち、24.2cm～24.5cmを計る。器表が剥離しているため調整方法については不明である。5は胴部に一対、6は胴部から底部にかけて1箇所の黒斑がみられる。赤褐色を呈する。

壺形土器（7～11） すべてS字状口縁をもつ壺である。口径18.8cm～24cm。胴部から急に短



かく外反し、すぐに立ちあがる口縁部をもち、端部は若干外へつまみだされる。端部内側は平坦面をつくる。口縁部折り返し部分に刺突文が施される。口縁部と胴部の接点から縦方向の粗い刷毛目が施され、その後に頸胴部に横方向の刷毛目が施される。横方向の刷毛目までの縦刷毛目は横ナデによって消される。頸部内面には横方向の粗くて深い刷毛目が施される。胎土中に多くの砂粒を含み、器壁は薄いが堅い。茶褐色を呈し、口縁折り返し部分下方に煤の付着がみられる。10は7の胴下部、11は8の底部である。SD 4からの出土である。

**高杯形土器（12～15）** 12、13は平坦な杯底部からゆるやかに内彎しながら大きく開く口縁部をもち、口縁部と杯底部に稜線をもつものである。口縁端部は鋭く、断面三角形を呈する。12は頸部からやや内彎しながら裾部へ聞く短い脚部をもち、脚中央部よりやや上方に三方の円形透孔を施す。13は脚部不明である。色調は、12が明茶色、13が赤褐色を呈し、胎土は12がきめこまか

く13は多くの砂粒を含む。調整方法は不明。14は内彎しながら開く裾部をもち、脚部中央よりやや上方に三方円形透孔をもつ。裾部に黒斑がみられる。15は細い頸部から徐々に開き、裾部で大きく開く脚部をもつ。脚部中央からやや下方に三方の円形透孔をもつ。赤褐色を呈する。

円筒埴輪片（16）ほとんどがタガをもつ基部破片で、口縁部の出土は2点であった。基底部の出土はない。全て土師質のもので、須恵質のものは出土していない。基部の外表は縱方向の細かい刷毛目が施され、タガ上端、下端ともにナデ付けされる。タガ上部は横方向に刷毛目が施される。口縁部は剥離がひどいので、調整方法は不明である。器厚は8mm前後である。赤褐色を呈する。内面調整は不明。

形象埴輪片（17）範描平行線が5mm～1cm間隔で施されているもので、9点出土している。破片のみの出土で全体の形狀は不明である。

その他、須恵器が出土しているが、図化できるものはない。杯身、高壺がある。

### 3. 奈良時代の遺物

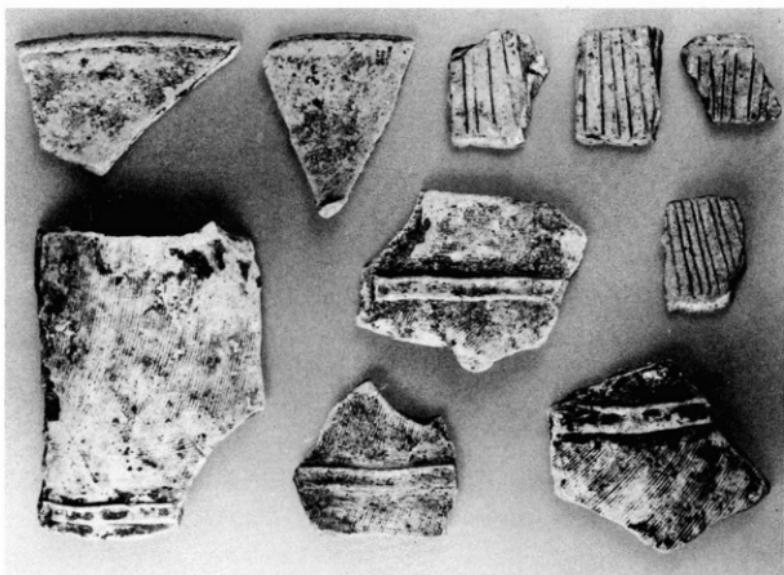
宝珠形つまみをもつ須恵器杯蓋が出土しているが、図化できるものはない。

### 4. 平安時代の遺物

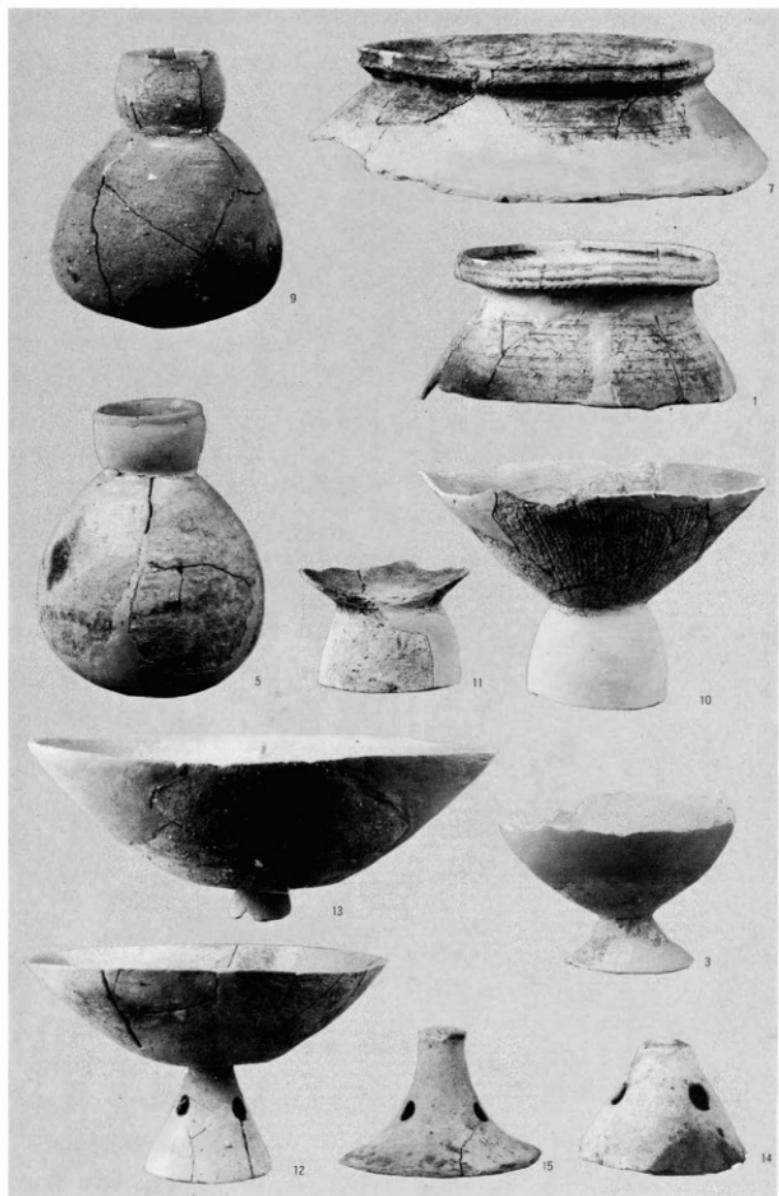
青磁碗（18）底部の小片である。弁中央のもりあがった花弁がうかがえる。濃緑色を呈する。

### 5. 鎌倉時代の遺物

山茶椀底部、口縁部、土師器鍋などの破片が出土しているが、細片のため図化できるものはな



円筒埴輪片、形象埴輪片(右上)写真 (1:3)



A区出土土器写真 (1:3)

い。

#### 6. 室町時代の遺物

おろし皿（19） 底部内面に篦描による縦横のおろし目が施される。瀬戸焼のものか。

#### 7. 時期不明の遺物

砥石（20） 片面が使用され中央部がくぼむ。砂岩製である。

平瓦片（21） 平瓦の破片であるが、裏面に布目痕が残る。

#### (2) B 区

出土した遺物は、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器を中心で、他に鉄製品、土製品、石製品がある。

これらの遺物のうち弥生時代後期の土器はほとんどが堅穴住居址からの出土である。量的にはA区より少ない。遺物の遺存度はA区と同様に悪く、調整方法等が不明なものが多い。

#### 1. 弥生時代後期後半の土器

壺形土器（22、23） いずれも広口壺である。短くよく外反した口縁部をもち、端部は平坦に仕上げられる。22は、口径11.4cm。口縁部から細かい刷毛目調整が施される。明茶色を呈する。23は、口径13cm。細かい刷毛目調整の後、篦研磨される。共にSB2からの出土である。

27、28は胴部の破片である。27は3条の貼り付凸帯が巡る。櫛描波状文も施される。28は丹彩が施されたものである。24～26は底部の破片である。

壺形土器（29、30） 29は口径17cm。頭部から立ちあがりぎみに外へ開く口縁部をもち、端部は短く鋭くつまみだされ、断面三角形を呈する。赤褐色を呈する。30は口径12.5cm。小形品である。頭部から短く外へ開き、すぐにたちあがりぎみに屈曲する口縁部をもつ。端部は内側へ平坦な面をつくる。茶褐色を呈する。29はSB3、30はSB1からの出土である。

31、32は台付甕の底部である。31は短い台部をもつが、32は直立ぎみの長い台部をもつ。31は赤褐色を呈し、胎土中に多くの砂粒を含む。32は淡黄色を呈し、胎土はきめこまかい。

高杯形土器（33～35） 33、34は筒状の頭部をもち、脚柱上部に三方の円形透孔をもつもので、篦描横線が施される。赤褐色を呈する。35は、頭部から内彎ぎみに大きく開く裾部をもち、脚中央部よりやや上方に三方の円形透孔を施す。明茶色であるが、一部で黒色となる。33、34はSB1出土、35はSB3出土のものである。

他に手焙形土器（36）の破片や罐底部（37）が出土している。

#### 2. 古墳時代の土器

##### 一土 師 器 一

高杯（38、39） 共に筒状の頭部をもち、裾部で急に外へ屈曲して開く脚部をもつ。端部は下方へひきだされるようにつくられる。38は裾部径15cmと大形品である。赤褐色を呈する。

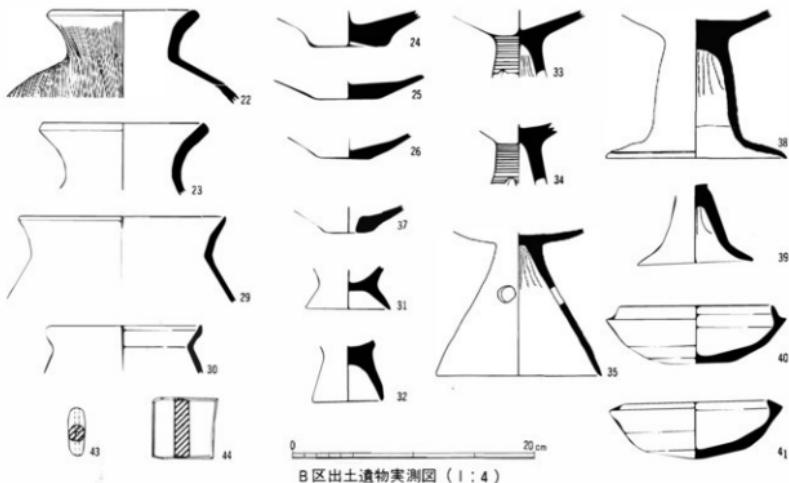
##### 一須 恵 器 一

杯身（40、41） 口径12cm～12.7cm。内傾する短いたちあがりをもち、端部は丸くおさめられ

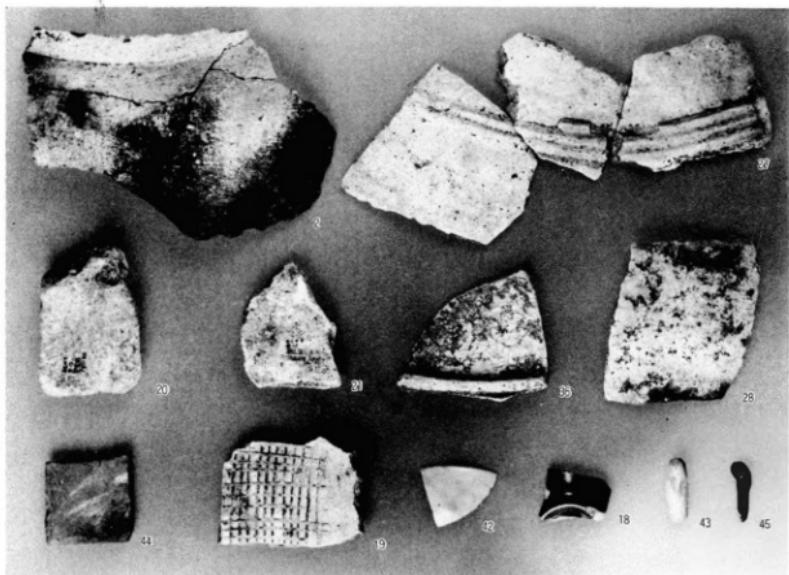
る。受部は水平又はやや上向きに短く外へのびるもので、端部はたちあがりと同じく丸くおさめられる。たちあがり部と受部の接点は浅く凹む。体部は約 $\frac{1}{3}$ がヘラ削りされるが粗い。

### 3. 平安時代の土器

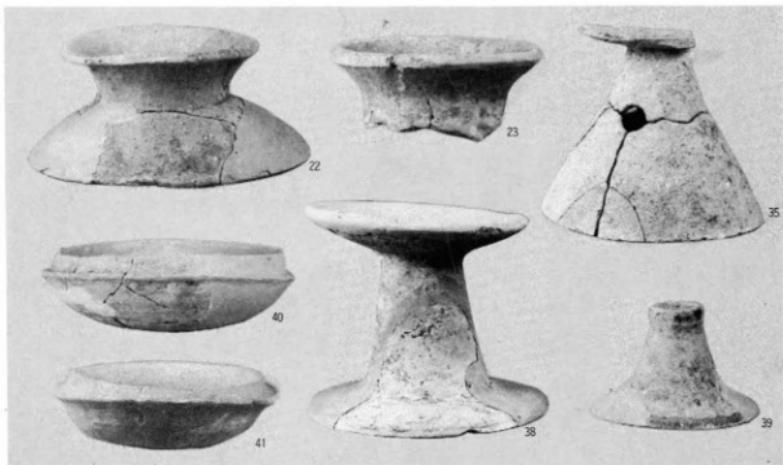
青磁 (42) 梱の口縁部である。淡青色を呈する。



B区出土遺物実測図 (1:4)



出土遺物写真 (1:3)



B区出土土器写真 (1:3)

#### 4. 時期不明の遺物

土錘（43） 全長3cmの小さなもので、径3mmの孔が通る。

砥石（44） 扁平で細長いもので、各面がよく磨かれている。砂岩製である。

鉄製品（45） 現存長3.7cm。釘のようであるが鋸がひどく原形は不明。

## V 結 語

深田遺跡は金沢川右岸の標高約6mの沖積地に営まれた弥生時代後期後半を中心とする集落址である。

今回の発掘調査は遺跡範囲約10,000m<sup>2</sup>のうちわずか1,400m<sup>2</sup>を調査したにすぎないが、いくつかの点を明らかにすることができた。若干の私見を述べて結語としたい。

A区では溝址から甕形土器、高杯形土器等が一括して出土した。これらは欠山期のものと思われる。

又、土塹や大溝からは多量の円筒埴輪片が出土した。今回の発掘区の南側にある場所の排水路試掘の際に2箇所で大溝を検出しており、それはS D 2の継ぎと思われる。同じように円筒埴輪片が出土している。これらの溝址が円形に巡るとすれば径約30mを計る。埴輪等は別にして古墳の周溝と思われるが、立地条件等からも疑問が残る。今後の調査に期待したい。S K 7からも多量の円筒埴輪片が出土しているが、その遺存状態や出土状況から窯址とは思われない。

B区では弥生時代後期後半の竪穴住居址を5棟検出することができた。重複しているが、出土遺物等からも單一的な時期とみた。弥生時代後期の竪穴住居址のプランは、四日市・西ヶ広遺跡で知られるように主柱穴や貯蔵穴等と画一性が認められるが、当遺跡のように末期になるにつ

れて画一性がなくなるのか、主柱穴や貯蔵穴は検出できなかった。

又、柵列状遺構を検出したが、それに伴う構築物を検出できず、どのようなものに付属するのか不明である。ただ南北軸に直交するという点が興味あるところである。

竪穴住居址はB区で検出したが、検出状況や遺跡の範囲等からみて、南西部に遺構は広がるものと思われる。

(早川裕己)